幽霊人形は推理がお好き　　　　　　　　　ノベル＆シナリオ専攻　上荒磯　佑哉

一人の青年に多数の視線が向けられる。絶え間なくフラッシュがたかれ、質問や要望が投げつけられる。

『茶ノ助さん。今回の事件解決の糸口は！』

『茶ノ助さん目線をこっちに！」

茶ノ助と呼ばれる青年、本名はノハットと丸グラサン、そして二十歳前後にしては異様に似合うちょび髭をたずさえた顔を向ける。

『おいおい、そんないっぺんに質問しないでくださいよ。まぁ、どんな難事件もこの俺ちゃんにかかればちょちょいのちょいですよ』

　しかし、世間がこの若き青年探偵の活躍に沸いた期間はこの日から数ヶ月までだった。なぜなら彼は突如何者かに殺されたからである。

　そして、現在……

「俺の部屋で、絶賛居候中と」

　は自分が借りている紅麗館という学生アパートで昔の雑誌を読みながらそんな独り言にも似た突っ込みを入れる。

　すると、彼の耳元で怒号が聞こえる。

『誰が、居候だよ。居候してるのはお前の方だろうが！　俺の部屋に勝手に転がりやがって！』

　そう怒号を言うのは今し方、白川羽矢が見ていた古い雑誌に載っている美和茶ノ助その人である。だが、この雑誌に載っている通り彼は死んでいる。では、なぜここにいるかというとこの部屋は地縛霊として住んでいるからだ。

『おいっ！　おいっ！　無視すんじゃねーよ！　聞け！　白川羽矢！』

　羽矢は耳がキーンとなりとっさに耳を塞ぐ。

「うるさいな！　耳元で大声出さないでください！　幽霊ならもう少し大人しくしてください！」

『ふん！　いいじゃねーかよ！　基本誰も俺ら幽霊の事は見えないから暇なんだよ～。かまってくれよ～』

　そう言い、茶ノ助は俺の頬をツンツンと突く。羽矢はウザく思い言う。。

「てか、そんなに暇なら他の部屋の人と交流すればいいでしょ。三号室の人とか茶ノ助さん向きな事してるみたいですよ」

『あーダメダ。俺ちゃんオカルト系とか専門外だから。除霊とかできないし』

　茶ノ助は、空中にフヨフヨと漂いながら言う。幽霊なのにオカルト系が駄目という矛盾に羽矢は内心ツッコミを入れる。

「てか、茶ノ助さん。俺まだ報酬貰ってませんよ」

『報酬？　……何だっけ？』

「忘れたとは、言わせませんよ。仕事を手伝う代わりに俺の勉強みてくれる約束でしょうが！」

『ちぇ……へいへい分かりましたよ。で、どこが分からないわけ』

　茶ノ助はそう言うと羽矢に近づく。羽矢は鞄からノートを取り出す。羽矢は茶ノ助の仕事を手伝う代わりに学校の授業などで分からないところを教えて貰っているのだ。その、時だった。

『あの、ここって紅麗館の四号室ですか？』

　その声に二人は窓を見る。そこには、一人の少女がいた。白い袖の無いワンピースを着た小六の少女だ。ただし、その白い足は地面についてはいなかった。

「君は……幽霊だな。そして、ここに来たって事は」

『その、商品を売って欲しいんです』

　それから、数分後。俺は、改めて机を挟み前に幽霊の少女をその前に羽矢と茶ノ助が座る。

「えーと、とりあえず名前から聞こうかな。名前は？」

　しかし、少女の幽霊は口を紡ぎ何も話そうとしない。

『おいおい、羽矢顔がこえーぞ。かわいこちゃんが、怯えてるじゃないの』

「なら、アンタがすればいいでしょ！」

『えーやだよ。俺ちゃん、十八以下は射程圏外だから』

「アンタの都合かよ！　邪魔するなら、どっかいってください。アウスアウス」

　そう言い、羽矢はシッシッと茶ノ助を部屋の隅に追いやろとするがそんなことに従う訳もなく茶ノ助は羽矢と少女の幽霊の周りをグルグルと浮遊する。しかも、幽霊の少女を見るときだけ若干目つきが鋭い。

「と、話がそれたね。ま、ゆっくりでいいよ」

　そう言い、羽矢はズズとお茶を一口飲む。すると、幽霊の少女はモジモジしながら言う。

『えっと、私の名前は真白……です。ここには、斉藤さんっていう人に聞きました』

　斉藤とは、昔ここに現れたサラリーマンの幽霊のお客だ。今も、成仏すること無く幽霊として存在し、今回みたいに出会った幽霊に羽矢たちの事を話しお客をよこしてくれる人だ。

「真白ちゃんか。じゃ斉藤さんに聞いたって事はある程度ここのことも俺たちのことも知っている訳だ」

　そう言うと、真白ちゃんはこくりと頷きながら言う。

『えっと、ここでは幽霊が見えて、お兄さん達が幽霊達の悩みを解決してくれる……って聞いています』

　そう、真白のいう通りこの紅麗館では普段幽霊の見えない人達も見ることができる。原理は……羽矢も良くは分かっていない。ただ、一つだけ言えることはここに入居している人は例外なく幽霊と何らかの形で関わっているということだけだ。

「まぁ、大体はそんな感じかな。ただし、少し誤解がある。ここは幽霊の悩みを解決するところじゃ無くて幽霊の求めている物を調達、売るのが俺たちの仕事さ」

『お仕事……？』

真白は、頭を捻る。

　羽矢は、真白にもっと分かりやすく伝える為に例を交えて話す。

「えっと、もっと簡単にいえば例えば好きな漫画を読めずに死んだ人がいたとして、その人にその読みたかった漫画を入手して売るって感じ。そして、そのかわり俺たちが困っていたら助けて貰う」

　真白ちゃんにここをはなした斉藤さんがいい例だ。あの人は対価として、今回みたいに未練のある幽霊に俺たちのことを宣伝して貰うようにしている

『ま、真白っちはそんな深く考えずにさっ！』

　そう言い、いままでそこでただただ自堕落に浮遊していたら茶ノ助さんはくるりと空中で回転し俺の隣に来るという。

『とりあえず、何でも話してみなよ。何かあって俺ちゃん達のところに来たんでしょ？』

　その言葉を聞き、真白ちゃんはしばらく黙っていたがポツリつぶやく。

『猫ちゃんを……探して欲しいの』

♢♢♢

　ところ代わり羽矢と茶ノ助さんはここら辺で一番大きな病院の中庭に来ている。理由は、真白ちゃんからの仕事についてだ。

「いませんね猫」

　真白の羽矢たちに対する仕事は猫探しだった。理由は、生前この病院に長く入院していた真白。そんな彼女の長い闘病生活の唯一の楽しみが病院内を散歩しているときに出会う黒い毛皮と青い瞳を持った子猫との戯れだったとの事。その子猫にもう一度会いあたいというのが真白の依頼だった。

　羽矢は許可を取り病院の中庭に膝をつき探すがみつから無い。

『ここには、いないんじゃないの～』

と、俺の耳元から声が聞こえる。

「あの、茶ノ助さん。俺の肩に乗るんじゃなくて働いてください」

羽矢は、声のする方に正確には俺の肩に乗っている赤いフードを着せた手乗りサイズの人形に話しかける。

『おいおい、寝ぼけたこと言わないでくれよー。こういう体を動かすのは羽矢の仕事でしょー』

　人形から茶ノ助の声が聞こえ、それと連動する形で表情が動く。何故人形が動くのかそれはこの人形に茶ノ助が入っているからだ。

　茶ノ助は、地縛霊のため基本的にあの部屋から出れないが無機物に憑依することで擬似的に外に出ることが可能なのである。

　最初は人形が動くことがかなり気持ち悪く羽矢は思ったがさすがもう慣れた。ただし、もしかしたら誰かに人形に話しかける姿を見られないかという不安はある。羽矢は、人形に語りかけるヤバイ人とも思われたくないし、ひとりでに動く人形を所持している異常な人とも思われたく無いのだ。

「ほっ」

『どうした？　もう、疲れたのか？　これだから、最近の若者は』

　羽矢は、肩に乗っている茶ノ助人形の顔をぎゅーッと掴む。

『いだっ！　いだだだ！　ちょ、辞めてー！』

「そう思うなら、茶ノ助さんも手伝ってください」

『分かった、分かったからー！』

　羽矢は、ため息をつき手を離す。

「全く元はといえば、こういうことをしてるのもアンアの為にやっているんだからもう少し協力してください」

　茶ノ助がこの仕事をする理由。それは、茶ノ助を殺した犯人、もしくはその犯人の手がかりを知っている幽霊を見つける為だ。

『へいへい』

そう言い、茶ノ助はその小さな体を生かし小さな隙間などを覗く。そして

『じゃ、ここにはいないし場所を変えよう』

「はっ？」

　茶ノ助さんの言葉に羽矢は口をぽかんと開ける。

「それって、どういうことですか？」

『そのままの意味。真白ちゃんは嘘をついてる。だから、猫はここにいない』

　羽矢は茶ノ助ノ言葉の意味は分かる。しかし、その言葉の真意が分からず頭を悩ます。

「それは、猫はもっと違う所にいるけど、それを真白ちゃんは何らかの理由で伝えれなかったってことですか？」

『いや。あの真白ちゃんが嘘をついているのは猫の居場所じゃなくて、全部だよ』

「全部？」

『そう、全部。なにもかも。生前、病弱でこの病院に入院していたことも、ここの中庭で猫を見たって言うことも全部嘘だよ』

「じゃあ……真白ちゃんの……真実は何ですか？」

　羽矢は、その言葉を言って後悔する。この世に未練があって未だこの世に執着している幽霊の経歴なんてハッピーエンドでは無い事を羽矢はこの仕事を通じて嫌というほど知っているから。

　しかし、それでも真実を知りたいという衝動に駆られるのだからつくづく、人間の好奇心とは恐ろしい。

　茶ノ助は、意気揚々と語る。きっと、真実にたどり着いてからずっと誰かに聞いて欲しくてウズウズしてたんだろと羽矢は感じ取った。

『では語ろうかな。まず、初めに真白ちゃんの直接的な死因は凍死だよ。その証拠に体に鮮紅色の死斑』

「凍死？　ってあの寒くて死ぬ？」

『そう、その凍死』

　そこで、羽矢の頭に疑問が浮かぶ。死因が凍死ならなぜ真白ちゃんはノースリーブの白いワンピースを着ていたのかということに。幽霊は死んだ直後の姿衣装でこの世に留まる。つまり、ワンピースで凍死となれば真冬で外に出るなどしないかぎりあり得ないのだ。と、そこで羽矢の頭で糸がつながったような感覚に襲われる。

『おっ、分かったみたいだねー。さすが、名門大学志望。理解が早い。そう、真白ちゃんはあの格好で外に出たんだよ。寒い寒い冬の外に。まぁ、出たというより出されたという方が正しいんだけど』

　能動的では無く受動的に外に出された。そこで、羽矢は嫌な予感に襲われる。

『ここで、ポイントになるのが誰に出されたか。ま、それは言わなくても分かるよね』

「……親に、ですよね」

『正解』

　羽矢の嫌な予感は見事的中した。真白ちゃんのたいして驚くことでも無い真実。それは真白ちゃんは実の親に殺されたいうこと。ネグレクトという方法で。

　ここからは羽矢の予想だが恐らく、真白の親は衣替えもしなかったのだろう。だから、真冬でもワンピースを着ていた。いや、着らざるを無くをえなかった。それがどれだけ寒い季節でも。そして……──。今にして思えば真白の依頼はそもそも前提から可笑しかった。

　羽矢が今まであってきた子供の霊の俺たちに対する仕事は、親や親戚に会いたいというのがほとんどだった。なのに、真白ちゃんはペットとして買ってた訳でもない子猫に会いたいと言った。普通の子がその事を願うことが可笑しかったのだ。そして、もう一つこれは茶ノ助さんの推理を聞いてて思ったのだが、常に清潔に保つ必要のある病院にどんな病原菌を持っているか分からない野良猫が出入りすること自体普通じゃないのだ。

「なんか、救いようが無い話ですね」

　そして、意味の無い真実だと羽矢は思う。このことを、警察に言ったたところで証拠は何も無い。凍死した証明である鮮紅色の死斑を持った死体も今は骨だけ、いや葬式をしたかも分からないから土の中かもしれない。まぁ、どっちにしろ羽矢は墓荒らしはしない。そんな汚名を被る義理も無のだ。。

『君は、こんな真実を聞いても怒らないんだね』

　茶ノ助はニヤニヤしながら羽矢に話しかける。恐らく、自分の推理を話せて今一番気分が良いのだろう。

　羽矢は平静を保ちながらいう。

「怒るって誰にですか？　真白ちゃんの親に？　それとも、こんなむごい事件を見逃した警察？　それとも、こんなことが起こる世界ですか？　どれにしろ、もう手遅れですよ。もうすでに終わったことなんですから」

『そうだね、けど少なくともまだやれることはあるでしょ。俺ちゃんにしかできないアフターケアが、俺ちゃん達の仕事はまだ終わってないでしょ』

「そうですね。それで、茶ノ助さん。どこに行けば会えるんです？　その件の猫に？」

『ついてきな』

　　　　　　　　　　　　♢♢♢

　そして、羽矢たちがついた場所は先ほどまでいた総合病院の近くにある俺もなんどか来たことのある公園だった。

「それでなんで、ここなんですか？」

『条件が合うからね』

「条件？」

『そう。羽矢は、どうして真白ちゃんがあの病院に猫がいるって思ったんだと思う？』

「それは、猫を病院で見たからじゃ」

『ぶー、ふせーかーい。そんなんだから、高校で首席とれないんだよー』

　　俺は、無言で茶ノ助さんの人形を握る。

『いだ、いだいいだいいだいいだい！』

　数分後

『正解は、病院じゃなくてここで猫を見たからさ。けど、真白ちゃんはその猫を見るまでここで猫を見たことがなかった。だから、猫が巣を作りそうな場所として病院にいると思ったんだよ。さて、ここが一つ目の条件。そして、もう一つがあれ』

　そう言い茶ノ助さんは人形の体を使いある方向を指さす。そこには古ぼけたアパートがあった。

　なるほど、なんとなく分かった。きっとあれが真白ちゃんの生前住んでた家なのだろう。そして、それこそが二つ目の条件。近くに家があること。幼い真白ちゃんが家を追い出されたとしてそう遠くまでは行けない。

　茶の助さんは、近くに猫が出そうな公園で近くに人に住める家と病院がある場所としてここに来たのだろう。たしかに、ここなら屋根付きのベンチもある。アパートの玄関よりかは幾分か寒さを紛らわす事ができるだろう。

「じゃぁ、後はここで猫を探せばいいんですか？」

『いやそんなことはしねーよ。だいたい野良猫なんて行動範囲広いだろうし、真白ちゃんがみた猫がここに住み着いてるとも限らないしね』

　確かにその通りだ。

「じゃどうするんですか？」

『餅は餅屋。公園のことなら、公園の主に聞くのが一番さ』

　そういうと、茶ノ助さんは空に向かって叫ぶ。

『ちょーろーう！』

　数分後、一陣の風が吹きと同時にベンチから気配を感じた。が、ベンチには誰も存在しない。

『来たみたいだな。羽矢俺をベンチの前の机に下ろしてくれ』

　羽矢は、茶ノ助さんが言ったとおりにベンチの前の机におろす。すると、茶ノ助はまるで、そこに誰か言うように一人で話し出した。まぁ、実際そこにいるんだけど。見えないだけで。

　先ほど茶ノ助が叫んだのは幽霊を呼び出す為だ。原理はよく分からないが呼ばれる来てくれるらしい。

　そして、茶ノ助が呼び出したのは長老という愛称がるここら辺の街の公園事情を熟知しているホームレスの幽霊だろう。確かに、うってつけの人材だ。因みに、どうして長老が茶ノ助の願いを聞いてくれるかというと、長老も俺たちに仕事を依頼したからである。

『羽矢見つかったぜ。俺ちゃんたちのターゲットが』

　その日の、夕方。羽矢達は改めて真白に来てもらった。

『あの……ここに来呼び出されったということは、その……見つかったんですよね？』

「それは……できなかった」

　真白ちゃんは、俺の言葉を聞いた瞬間。一瞬瞳を大きくするとすぐに

『そうですか』

　とポツリとこぼす。そして、そこにすかさず茶ノ助が言葉を話す。

『まぁ、肉体を持った状態ではだけど』

　そう言うと、ひょいっと茶ノ助は自分の腕の中にいるそれを真白に渡す。その存在は真白ちゃんの胸に顔を埋めると

『にゃー』

　と鳴いた。

『この子って……』

　茶ノ助が言うのはその黒猫は野良として生き、成猫にまで成長したがある日車に轢かれあえなく死んだらしい。茶ノ助は言う。

『さっ。俺ちゃん達の仕事はこれで終わりだ。後は、煮るなり焼くなり好きにするんだね』

　茶の助さんはそう言うと何も言わなくなった。

　勿論、真白ちゃんはその黒猫の幽霊を煮ることも焼くことも無かった。ただ一言

『ありがとう』

　とこぼした。

♢♢♢

　茶ノ助は、真白がこの部屋からいなくなった後ポツリと誰に言うまでも無く話し出す。

『きっと、真白ちゃんはあの一言から察するにお礼が言いたかったんだね。寒い寒い外で唯一温もりを与えてくれた存在に』

　確かに想像はしやすい。寒くて、孤独だった真白。そこに現れた黒い子猫。真白はその子猫を抱きかかえ暖を取ろうとした。まぁ、それでも真白は死んでしまったけれど。

　勿論これはただの、妄想だけれど。それでも……遅いかもしれないけどせめて幽霊になった今この瞬間だけでも、生前よりも幸せであって欲しいと羽矢は思った。